

2.2 データ共有と現地研修の継続によるスタディクラブの運営

～節なり会(群馬県館林市・板倉町など)～

(1) 概要

- ・平成30年に設立。キュウリ生産者が中心となり、JA 部会組織などから独立した運営を行っている。
- ・JA 邑楽館林管内のキュウリ産地(館林市・板倉町など)に会のメンバーの多くがいる。産地のキュウリ生産者は500戸で平均規模は約15a、平均出荷量は約30t(約20t/10a)である。生産者は個別選果による系統出荷を行い、キュウリ年2作型と水稻の複合経営が多い。生産者の約60%が65歳以上である。
- ・産地維持と収量向上を目的に、環境制御技術(環境モニタリング、CO₂施用)の導入が平成26年頃より始まったが、効果は安定せず技術の再現性が課題となっていた。
- ・平成29年に普及指導員の祖父江氏(現群馬県館林地区農業指導センター主任)が宮崎県のスタディクラブ(JA 宮崎中央田野支所胡瓜部会 ラプター会)を視察、その後クラウドを活用したデータ共有を開始した。
- ・摘心栽培によるキュウリ産地の中で、更新つるおろし栽培に会として取り組み、現在は会のメンバー全員が同栽培を行っている。
- ・メンバーの平均年齢は30代前半で、新規就農者も多く、メンバーの圃場巡回による現地研修(図1)や視察研修の回数を重ねることでベテラン生産者の技術や視点を学ぶ機会としている。メンバーの平均単収は30t/10a弱程度を産地平均より高い。

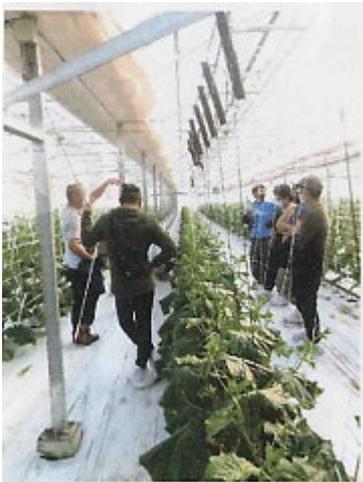


図1 メンバーの圃場巡回による現地研修の様子

(2) 運営内容

- ・有料の正会員（15名）と無料会員に分け、有料会員には視察研修への参加など学ぶ機会を多く設けている。
- ・会の参加対象は広く、隣県のキュウリ生産者や資材業者、LINEグループによる遠方からの参加者などもある。
- ・現在の主要な活動は、クラウドによるデータ共有（図2）、月2回の現地研修、先進地等への視察研修などである。



図2 クラウドを活用したデータのリアルタイム共有（環境データの例）

- ・初代会長で新規就農者であった永田氏、2代目会長の秋山氏、3代目の現会長の川島氏とも、JA管内のキュウリ生産者である。祖父江氏が当初より運営をサポートしている。
- ・会の活動と実績が積み重なり、視察研修先へのアポイントなどJAなど関係機関の支援も得られるようになってきている。

(3) 運営での特徴

- ・当初よりラプター会を参考にクラウドを活用したリアルタイムでのデータ共有を行った。Google Spreadsheetによる出荷データ（図3）、プロファイナダークラウドによる環境データの共有によって、自分の立ち位置を確認し、高収量生産者など自分の目標を持つようにした。

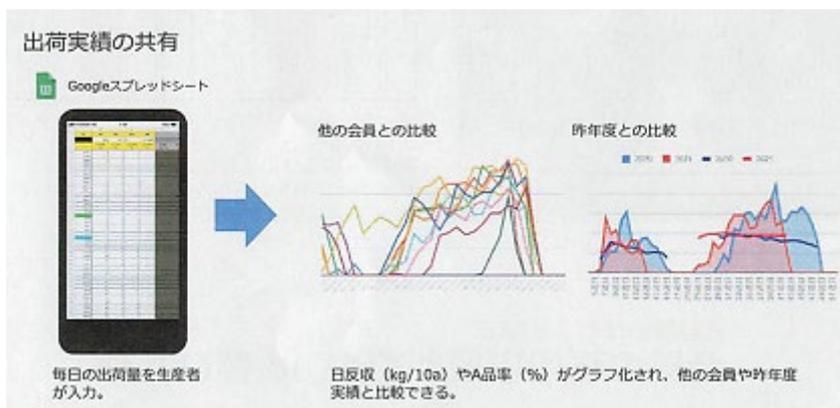


図3 クラウドを活用したデータのリアルタイム共有(出荷データの例)

- ・データは作物の反応を確認しやすい週単位で見ることを基本とした。また出荷データの入力は毎日メンバーが自分で行うこととした。出荷データは日単収(kg/10a)やA品率がグラフ化され、他のメンバーや昨年実績との比較が可能となっている。
- ・ラプター会では仕立て方や品種が揃っていたが、メンバー間では仕立て方、品種、作型も異なりハウス仕様も様々で、共通に調査ができない、データの比較が難しい問題が当初よりあった。結果的に現地研修でキュウリの樹姿を目で見て確認し、良し悪しを判断するのが近道となり、2年間ほどかけて運営を活性化して来た。
- ・現地研修では「心理的安全性※」の向上(図4)を心がけた運営を行っている。新規就農者などが何を発言しても、質問をしても許されるような雰囲気を保ち、積極的なコミュニケーションをはかっている。そのことでベテラン生産者からの知識獲得や視点の共有などを促進している。

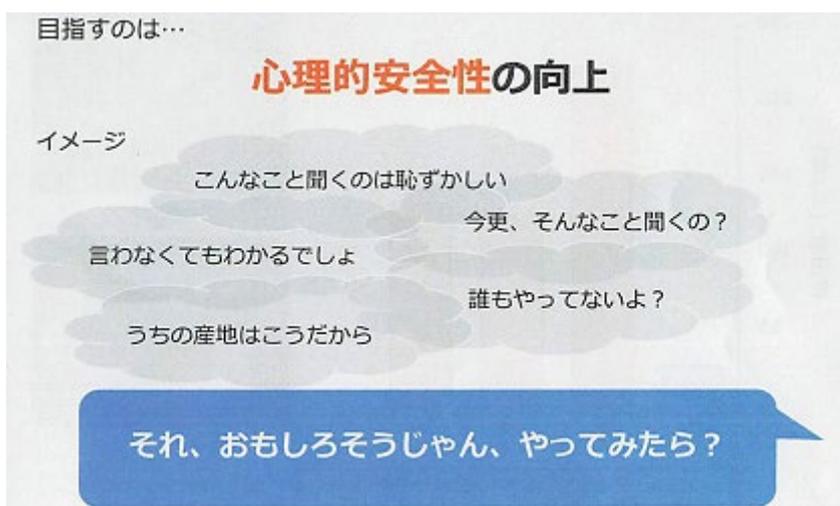


図4 心理的安全性の向上

※心理的安全性: アイデア、質問、懸念、または間違いを率直に述べても、罰せられたり屈辱を与えられたりしないという信念のこと。

- ・現地研修を頻繁に行い、年間で延べ 120 箇所の圃場を巡回し、新規就農者も短期間に経験値を高められるようにしている。1 回の研修で 5~7 箇所を巡回するため、1 箇所当たり 15 分程度の滞在時間の中で樹勢など生育状態を見極め、ポイントについて意見交換を行うようにしている。また前回巡回時の記憶が消えないよう、同じ圃場を毎月 1 回は巡回している。
- ・現地研修の場でベテラン生産者のキュウリに対する視点も共有され、メンバーのキュウリの樹姿への評価能力も向上している。現地研修中に Google フォームによるアンケートを行い、終了後にアンケート結果を見ながらの振り返りも行っている(図 5)。データ化が難しい樹姿についてアンケート結果をもとにメンバーの気づきや判断の共有をはかっている(図 6)。

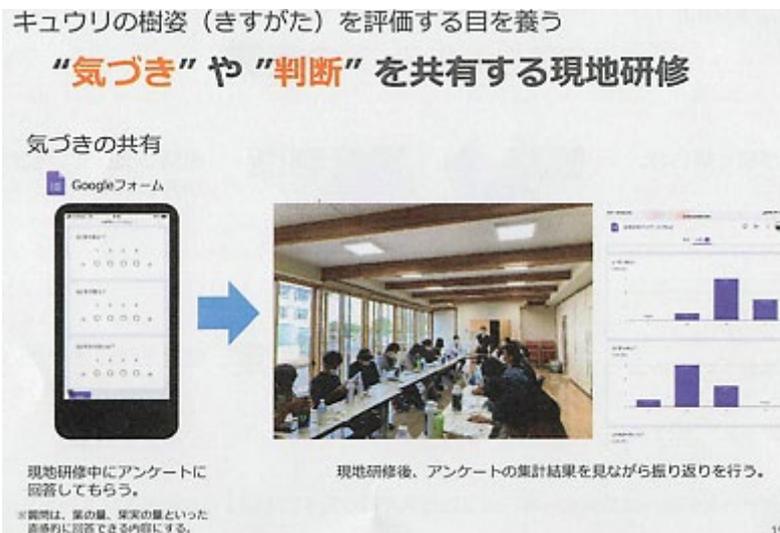


図 5 現地研修でのアンケートによる振り返り



図 6 環境データ、生産量データと現地研修でのアンケート結果と気づきの共有

- ・視察研修はメンバーの希望をもとに選定され、JA や関係機関の協力により行われている。
- ・情報をオープンにし、価値観も統一しない運営を行っている。技術を突き詰めるというより、年齢など垣根もなく悩みを共有するようなサロンを当初目指していた。
- ・会に賛同する高収量（平均単収の 2 倍程度）のメンバーが加わり、影響力が出たのがターニングポイントになる。そこからは活動が活発となり、データの蓄積や成果の発信も広まり、会も運営もまわるようになった。
- ・スタディクラブ活動の成果として、環境制御技術導入とあわせ当初より出荷量が平均で約 30%増加している（図 7）。

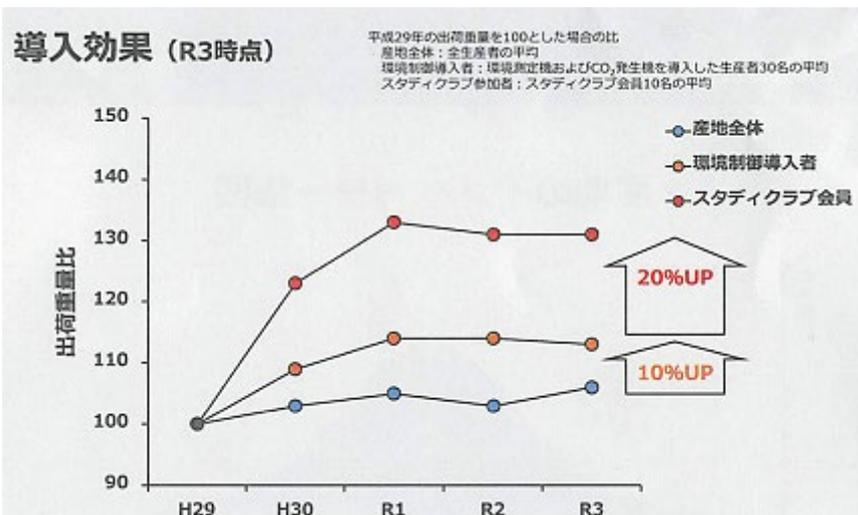


図 7 環境制御技術の導入とスタディクラブ活動による出荷量の推移

(4) 現会長の川島氏圃場

- ・JA 管内では唯一の高軒高ハウス（約 300 坪、間口 6.3m、軒高 3.5m、両天窗）、外張被覆資材：散乱光フッ素樹脂フィルム、二層カーテン、統合環境制御装置、日射比例灌水装置、養液土耕栽培、循環扇無し（温風暖房機 2 台の送風ダクトによる送風）。猛暑期でも蒸散による気化冷却効果と高い換気性能により、ハウス内気温は外気温より数℃低下すること。
- ・年 2 作型の更新つるおろし栽培中で、将来は規模拡大と雇用型経営を目指しハイワイヤー栽培や隔離栽培（養液栽培）を指向している。
- ・父親が 500 坪の従来型ハウスでの土耕栽培を行い、作型をずらし合わせての周年出荷を行っている。



図 8 節なり会川島会長の圃場の様子